

岐阜県教販通信

No.0031

GIKYOHAN TIMES

2024年4月発行

教科書を児童・生徒に無償給与

当社は岐阜県の全小中高校に100年以上教科書を供給し続けてきまして2021年度に、「スクールイーライブラリー」進呈させて頂きました。電子図書によって新しい読書の機会を与えることで深い学びにつながる一助となればと思います。第4回「本の日読書感想文コンクール」開催します。また第二回児童図書展示会も開催します。当社HPでご確認ください。ご参加よろしくお願いたします。



寺脇 研 氏

寺脇研(てらわき けん、1952年～)元文部官僚。星槎大学大学院教育学研究科客員教授。官僚時代には文部省 NO.1 の論客でならし、ゆとり教育の広報を担った。福岡県福岡市出身

新年度が始まる4月は、新しい出発の時期だ。1日には、企業や官庁の入社式、入庁式が新聞、テレビなどで報道され、今日から社会人となる若者たちの、インタビューに答える姿がういういしい。2日以降には、幼稚園、小学校から大学まで、入園式、入学式が連続する。今年は気候の影響で桜の開花が遅れたから、久しぶりに満開の桜の下での入園式、入学式となったところも多いのではなかろうか。

わたしが文部省(当時)に入省した49年前、1975年の4月1日も、庁舎中庭の桜は満開だった。その日に交付された辞令には、「初等中等教育局教科書管理課」との配属先が示されており、子どもたちの教育を担当する部署に勤めることができる! と張り切ったのを今でも憶えている。

教科書管理課は、各地域の学校が、文部省の検定を受けた教科書のうち、どの会社のもを使うかを決定する<採択>と、選ばれた教科書を各会社が必要部数だけ印刷、製本するのを見守る<発行>、そして、全国津々浦々の学校へ確実に届け、児童・生徒の手に渡るようにする<供給>の仕事を担当していた。【現在は、<検定>の担当だった教科書検定課と統合されて、「文部科学省初等中等教育局教科書課」になっている】

勤務を始めるに当たり、上司から見せられたのが、教科書を児童・生徒に無償給与として配布する際の「給与袋」だった。入学式を終えた小学1年生たちに、この袋に入った真新しい教科書が手渡される。これは現在の学校現場でも行われているから、小学校関係者はよくご存知だろう。

袋の表に記された「にゆうがくおめでとう」のメッセージの下には、手を繋いで登校する新品ランドセルの男女児童を見守るように満開の桜の木を配したイラストが使われている。この図柄は、今も昔も変わっていない。桜の下での入学式は、国民に共通のイメージなのだ。1886(明治19)年に日本の会計年度が4月と決まったと同時に、小学校の入学時期は4月に統一された。以来140年近くにわたり行われてきた中で、これがすっかり定着している。

なぜ1年生にだけこの袋があるかという、1963(昭和38)年度に教科書無償給与制度が始まったときは、その年の1年生だけが対象だったのである。その後、学年進行で少しずつ拡大していったから、小学1年生から中学3年生まで全生徒が無償で教科書を手にすることができるまでには6年間を要し、現在のような無償給与制度が完成したのは1969(昭和44)年度になる。1956(昭和31)年度に産まれた、本年4月1日現在67歳の世代から下、この制度の恩恵に浴しているわけだ。

それ以前の世代には馴染みのない制度だから、袋の裏側には、「保護者の皆様へ」と題し、文部省(現在は文部科学省)からの説明が載せてある。今の保護者は、自身が無償給与を受けた世代だから当然と受け止めているだろうが、今度は保護者、納税者の立場として、制度に込められた意義を願いを受け止めてほしいものだ。

あのとき、この袋をわたしに見せた上司は、こうした教科書無償給与制度の沿革と意義を教えるとともに、初めて教科書を受け取る1年生たちの驚きと喜びの表情を想像させ、<発行>と<供給>の業務の責任の重さを教えたかったのだろう。たしかに、身の引き締まる思いがした。

これが、わたしにおける教育行政という仕事のスタートだった。以後31年半、教育に関するさまざまな分野の行政に携わったが、このとき抱いた初心を、常に頭に置いて仕事をしてきた。次の年にはお隣の教科書検定課へ異動し、<検定>業務を担当することになったから、自分の教育行政官としての原点は、教科書なのである。

原点を意識してから50年近く後、縁あって、岐阜県における<供給>の責任を一手に担う岐阜県教販が発行する「教販通信」に、こうして原稿を書いているというのは、改めて感慨深い。岐阜県の学校教育関係者の皆さんと、この「教販通信」で繋がりを、今後の岐阜の教育について意見交換できるのも、若き日に教科書行政に心血を注いだおかげだと思っている次第だ。